

幼児の教育

創刊125年

子ども学の源流を次世代につなぐ



2026-2027

第1号

冬

=since 1901=

写真

1 子どもの情景

巻頭言

4 デザインの学びと幼児の学びの重なり

須永剛司

特集

10 座談会

保育の日々を新しく考える 8

保育と教育を一筆書きで描く

能登比呂志

川田雄也

伊垣尚人

高橋志緒

久保健太

実践

26 私の保育ノート

4月の子どもたちと

興梠侑

連載

30 保育を見る眼(8)

― 瞬間に 대응するということ ―

西隆太郎

シリーズ

34 子どもが暮らす場所を訪ねて

つくりだす力、つくりだせる場

― くにたち未来共創拠点 矢川プラス(1) ―

刑部育子

宮里暁美

三原凜子

食

41 ゆるりとつくる

おいしい生活 その⑧

川島雅子

藤吉陽子



視点

42

大好きな海の生き物を創造の源に

— さかなクン探究隊と表現活動 —

丸山素直

文化

49

新鎌倉おもちゃ屋物語 その8

黒須和清

探究

61

保育学における

「子ども理解」をめぐる言説の諸相

吉田直哉

目録

62

『幼児の教育』令和8年総目録

63

子ども学のひろば

イベント・メディア情報

読者投稿・編集後記 他



座談会

特集 保育の日々を新しく考える 8

保育と教育を一筆書きで描く



乳幼児教育と小学校との接続を、子どもにとって無理のないものにしていくことは大事です。そのためには、授業のあり方や一日の過ごし方など、さまざまな仕組みを整える必要があります。それに加えて、保育者と学校教員とが使う言葉のギャップを埋める必要があります。

今回の座談会は、そのギャップを埋めようとする試みです。桐朋学園の幼稚園、小学校の先生方にご協力いただきました。

(編集委員会)

【今回の参加者】

能登比呂志 川田雄也
伊垣尚人 高橋志緒
久保健太

保育と教育を

一筆書きで描く

保育と教育を一筆書きで

久保 まずは今日の座談会の趣旨を、久保から説明します。今日は、保育と教育を一筆書きで描くような言葉を、皆さんと見つけていきたいと思っています。

保育（乳幼児教育）と学校教育の間では、子どもたちも「小1プロブレム」といわれるギャップを感じている。一方で、保育者と学校教員の間でもギャップを感じるときがある。そのような状況の中で言葉のギャップだけでもなくしておきたい。

桐朋学園の皆さんだったら、幼稚園と小学

校とで身の置き場は違うかもしれないけれど、同じ屋根の下にいるという側面もあるから、共通言語をつくりやすいと思います。あるいはブレやギャップも確かめやすい。そのような趣旨で、今日は語り合いたいと思います。

感じる主体性と考える主体性

伊垣 今日の座談会に先立って久保さんから『主体性が湧き出ちゃう保育』（中央法規出版2026年）という新刊を送っていただいたのですが、とても面白かった。

特に「感じる主体性」と「考える主体性」という考え方が面白かった。

久保 うれしい感想をありがとうございます。あらためて、私から説明しておく。「感じる主体性」というのは、「やりたい」「やりたくない」「なんかいい」「なんか嫌だ」といった、その人ならではの感覚が、その人の中に湧き出たり、収まったりしてしまう働きです。

保育を見る眼（8）

— 瞬間に応えるということ

子どもとのやりとりは、ふとした瞬間に生まれて、心に残るもの。そんな一面から、保育について考えます。

7月のある日、久しぶりにこども園を訪れた。いつもは毎週通って子どもたちとかかわっているのだが、さまざまな事情があつて、なかなか行けていなかった。ちょうど週末には夏祭りがあるので、5歳児の子どもたちは先生と一緒に、お店で売るものを作ったり、踊りや歌を楽しんだりしていた。

西 隆太郎

（大学教員）

イタドリ思い出

階段を上がってやって来た私を、5歳児の子どもが見つけるなり、こんなふうに声をかけてくれた。「ねえ、あの時のイタドリ、全部食べた？」

そういえば、このクラスの子どもたちとゆつくり遊んだのは彼らが4歳児の頃で、もう1年近くたってしまっていたのだった。あの頃、近くの広場で遊んだのだが、イタドリが盛んに生い茂っていて、ちょうどその季節が巡ってきたところだった。だからこの日、思



西 隆太郎（にし りゅうたろう）
お茶の水女子大学。専門：保育学、臨床心理学。

いがけなく私と出会ったときに、そのことを思い出したのかもしれない。

あの時子どもたちは、イタドリをちぎっては「これ、食べて」と私に持ってくるので、私なりに食べてもいたのだが、みんなでそうするのが楽しくなったようで、私の手もどんないっぱいになっていった。「全部食べてね!」とも言われたのだが、ちょうどそろそろ園に帰る頃合いになったので、ひとまず持ち帰ることにしたのだった。

そうしてこの日の出会い頭に全部食べたかどうかと尋ねられると、「そうだったね、一緒に遊んだね」というようなことは言ったものの、われながらそんなに洒落た^{しゃれ}応え方もできなかった。子どもたちは夏祭りでする踊りを披露してくれるところだったので、すぐに場面は移り変わってしまった。正直に言えば、私はあの時、イタドリの束を研究室に持ち帰って、子どもたちが言った通りに全部食べた

わけでもなかった。それでも、1年前のことを覚えていてくれて、それも出会った瞬間に言ってくれたことはうれしかった。

瞬間の心を受けとめる

こんなふうに、保育の中の一瞬にどう応えるか、迷ったり考えたりする体験は、誰にもあるだろう。倉橋惣三はそんなかわりのリアリティをよく知っていた人である。

『育ての心』には、「飛びついて来た子ども」という一文がある。子どもが親しみをもって飛びついてくるとき、どう応えるかを彼は問うている。「私は果たしてあの飛びついて来た瞬間の心を、その時ぴたりと受けてやったであろうか」。「時は、さっきのあの時であったのである¹⁾」。応答とは、相手から発するものがあつてなされるものであつて、こちらの意図が先にあるわけではない。子どもたちはしばしば、私たちの思いも寄らないときに、

あるいは他の用事に気を取られているときにも、やって来る。飛びついて来るとは、保育の中で大人が予想外の事態に出会うことをも言っているのだろう。ここで倉橋は、一瞬の心のやりとりの大切さとともに、私たちが自分の枠を超えて子どもに応える意義を示しているのだと思う。

倉橋の言葉は、出会いの一瞬のかけがえなさをあらためて思わせる。だからその瞬間を逃すことは、ともすれば永遠の悔恨のように思われるかもしれない。ただ、それは半分真実であり、半分は違っているように私は思う。何気ない一言から、信頼関係が崩れ去ってしまふことは、実際にある。だからといって、「ぴったりと受け」ることなどできるのだろうかという懷疑や悲観に陥るのも性急な話であって、倉橋が言いたかったのは、そういうことではないだろう。

相手とかかわろうという意志があれば、関

係は新たに開けてくる。「あの時」を逃したことにさえ気づかないのと、気づいてその重みを感じていることは、ずいぶん違っている。後者は次の出会いに生かされ得るし、それに応じて子どもは寛大にも次の機会を与えてくれるかもしれない。1年たつて「あの時」をよみがえらせてくれることもあるのだ。そんな可能性も、子どもと出会う経験が教えてくれるところである。保育のこと、人間のことは、文字通りだけではなく、経験に根ざした実質において理解すべきものだと思う。

子どもの言葉も同様に、文字通りを超えて捉えられるかもしれない。考えてみれば、その子だつて私がイタドリを本当に食べたかどうか、情報として確認しなかったわけでもないのだろう。ただ「あの時一緒に遊んだね。楽しかったね」という思いを共有してくれたわけで、私も同じようにうれしく思ったことが、その子に対する私なりの応答だったのだ

と思う。半分は応えられなかったが、半分は何かを返せていたと言えるのかもしれない。

大人は瞬間に応えることを難しく思うが、子どもは違っている。突然現れた私にかけてくれた言葉の、なんと適切なことだっただろう。この日私に会うことは、その子の予定にはなかったことだが、そこでかけてくれた一言には、私たちの思い出も、親しい歓迎も込められている。保育を見る眼は子どもの側にあると言ったことがあるが、ここでも子どもが瞬間を捉える心のやわらかさに触れられたように思う。

雑草の生命

保育の中では、ふとした一瞬にも考えさせられることが多くある。保育の中の大事なことは、視点を定めれば順序立って見えてくる、というわけではなく、むしろ私たちの焦点の外から、何気ない場面を通して迫ってくるも

のではないかと思う。

倉橋惣三には『幼稚園雑草』³⁾という著書もある。体系的な書物ではない。保育の場に身を置いて、子どもたちと共に遊ぶ中で生まれてきた思いを記したものである。だがそこにこそ、型にはめられることのない、保育の生命が表れている。こども園の広場も、そうした思いに満ちている。子どもたちが手折ってくれた一節を、私もここに書き留めておきたい。

参考文献

- 1) 倉橋惣三「飛びついて来た子ども」『倉橋惣三選集第三巻』フレーベル館 1965年 p.40。
- 2) 西隆太郎「保育を見る眼(2)―見ることを妨げるもの」『幼児の教育』第124巻第3号 2025年 pp.28-33。
- 3) 倉橋惣三「幼稚園雑草」『倉橋惣三選集第二巻』フレーベル館 1965年 pp.6-420。